

成果報告書

2025年 4月 15日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	研究助成		
研究および教育普及活動の期間	2024年 4月 ~ 2025年 3月		
フリガナ	カナガワダイガク ソガベ・ヨシオカケンキュウシツ		
大学（研究室等）名 学会・博物館名	神奈川大学 曾我部・吉岡研究室		
フリガナ	ソガベ マサシ	職名	
代表者名	曾我部 昌史	教授	
フリガナ	ヨシオカ ヒロユキ	職名	
担当者名	吉岡 寛之	特別研究員	
所在地	〒221-0802 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3丁目27-1		
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	地域の記憶を記録し共有する場をつくる実践的研究 ー徳島県美波町の古民家を活用した暮らしの資料館ー	
	【目的】	本研究の目的は、古民家を地域文化を伝える民俗資料と捉え、活用しながら展示する仕組みを構築することである。多くの古民家では改修工事の際に内装や生活用具は撤去処分されることが多い。しかしこれらには、建設時から現在まで暮らしの変遷が刻まれており、民俗資料としての価値が高いと考える。古民家の内装および生活用具に着目し、実際の古民家を使った展示を実践する中で、単なる民具のディスプレイにとどまらない資料展示方法や、アーカイブ構築方法、地域拠点的な要素を組み込んだ設計手法を示す。	
	【実施体制】	神奈川大学建築学部曾我部昌史を中心に、助手1名、特別研究員3名の計4名を主要メンバーとし、学生チームや地域団体などと共同しながら、調査・設計・設営を行う。実施手順は、①対象となる古民家の調査。構成要素の分類。②内部空間の構成方針を検討、決定。③内装、生活用具など構成要素の再配置の3フェーズからなる。各フェーズでは住民へのヒアリングなどを行い、フィードバックを記録する。一連のプロセスを分析することで地域文化の展示施設としての古民家活用の可能性を示す。	
	【実施方法】	活用可能な古民家の実測調査を行うとともに一部解体を行いながら、使用材料を洗い出す。同時に、近隣の古民家に関する資料整理や古写真の調査、地域住民へのヒアリング調査を行い、地域固有の素材や設えに関する特徴を掴む。以上の調査を元に、展示計画を策定する。展示においては、室内で使われていた材料の再構成にとどまらず、地域住民から提供された物品も取り入れ、地域の記憶がより強く残る計画とする。調査や展示設営工程を整理分析し、本研究の可能性を確認する。	
	【成果と社会的効果】	[成果]内装や生活用具の民俗資料としての価値を明らかにすることで、地域特性を詳細に記録・展示する場となった。また継続的にアーカイブする仕組みをつくることで、文化継承の一助となる。 [社会的効果]小規模古民家の可能性を示すことで民間活用を促進し、地域文化の多様性維持につなげる。地域住民と協働する空間づくりのフロー自体が、地域活性化に向けたシビックプライドを醸成するためのモデルプランになると予想される。	
共同研究者等の有無	なし・ あり (人数 4名) 丸山美紀(神奈川大学 特別研究員)、長谷川明(神奈川大学 特別研究員)、秋山晃士(神奈川大学 助手)、阿部凌太(神奈川大学 修士1年/研究実施時)		
助成金額	50万円	主な用途	調査旅費、設営費

<p>研究室名 学会・博物館名</p>	<p>神奈川大学 曾我部・吉岡研究室</p>
<p>テーマ</p>	<p>地域の記憶を記録し共有する場をつくる実践的研究 —徳島県美波町の古民家を活用した暮らしの資料館—</p>
<p>【目的】</p> <p>本研究の目的は、古民家を地域文化を伝える民俗資料と捉え、活用しながら展示する仕組みを構築することである。実践的研究の場とするのは、徳島県美波町の門前町である。研究メンバーは2017年から、美波町の門前町再生事業の一環で空き家の調査および利活用に向けた改修を行っており、その中で以下の気づきがあった。</p> <p>【古民家の民俗資料としての課題と可能性】</p> <p>古民家の外観は景観保全の観点から地域内でも価値を共有しやすいが、内装については改修が重ねられていることが多く表面的には価値を見出すことが難しい。そのため改修時に無造作に撤去されることが多い。また家具や器、布といった生活用具も、保管場所等の問題から不用品として処分されがちである。しかし多くの改修工事では見捨てられがちな内装部材や生活用具には、明治・大正期から現在までの暮らしの変遷が刻まれており、地域文化の連続性を見出すことができる。そのような品々に各時代を表す資料としての価値を見出し再定義する必要があるのではないかと考えた。</p>	
<p>【実施体制】</p> <p>【主要メンバー】</p> <p>主要メンバーは以下の5名で、いずれも建築設計を中心とし、まちづくりなどに関わってきている。 曾我部昌史(神奈川大学建築学科教授) / 吉岡寛之(神奈川大学工学研究所特別研究員) / 丸山美紀(神奈川大学工学研究所特別研究員) / 長谷川明(神奈川大学工学研究所特別研究員) / 秋山晃士(神奈川大学建築学科助手)</p> <p>全員、継続的に美波町での諸計画に関わっており、2017年度以降は、本研究の対象エリアである門前町で活動を重ねてきた。また、長谷川は2020年以降、美波町に活動拠点を移しており、本研究の継続的な実施が可能である。</p> <p>【学生チームと地域団体など】</p> <p>学生チームは修士1年(2024年度)の学生を中心にまとめる。リーダーは以下である。 ・阿部凌大(神奈川大学大学院修士1年/研究実施時)</p> <p>また、地域には門前町の活性化を目指して設立された「発心の会」がある。発心の会のメンバーを中心とした地域住民や、美波町役場(産業振興課)と連携しながら丁寧な情報収集を図る。</p>	
<p>【実施方法】</p> <p>【実施準備】</p> <p>徳島県美波町の門前町に建ち並ぶ古民家のなかには、地域で活動を行う団体や大学の作業場所に転用されていた建物があり、これを研究対象として選定している。これまでの活動を踏まえ、本研究の趣旨や作業内容を美波町役場や地域団体などと共有し、住民へのヒアリング体制などをまとめる。</p> <p>【調査・検討】</p> <p>対象となる古民家の調査を行い、構成要素の分類する。その後、内部空間の構成方針を検討する。</p> <p>【展示実施】</p> <p>内装、生活用具など構成要素の再配置を行う。</p> <p>【継続的なアーカイブ化に向けて】</p> <p>ここでの展示をきっかけとし、地域の古民家の内装部材や生活用具をアーカイブが進められるよう、美波町での他の活動との連携を含め検討をする。本研究を元とし、地域での継続的な資料の収集に向けた活動に繋げる。</p> <p>【暮らしの資料館としての可能性の整理】</p> <p>本研究の成果として、実践に向けて進められるプロセスを整理、分析し、地域文化の展示施設としての古民家活用の可能性を確認する。</p>	

研究室名 学会・博物館名	神奈川大学 曽我部・吉岡研究室
テーマ	地域の記憶を記録し共有する場をつくる実践的研究 —徳島県美波町の古民家を活用した暮らしの資料館—

【研究・教育普及活動の成果】

【本研究の成果】

古民家に残っていた生活用具等を活用し、かつての暮らしを伝えるインスタレーションを作成した。2回の会期に分けて展覧会としての建物公開を開催し、会期中に行ったアンケートやヒアリング結果、写真などの提供を元に、展示内容の更新も行った。会期を通して167名の来場を記録した。



展覧会の様子



展覧会ポスター



来場者アンケート用紙



生活用具の展示1



生活用具の展示2



生活用具の展示3



生活用具の展示4



生活用具の展示5



生活用具の展示6

展示に向けた調査により、これまで廃棄されてきた古民家の内装や生活用具を民俗資料として位置づけ、その価値を確認した。特定の年代に絞らず建設時から現在までの民俗資料を対象とし、地域特性をより詳細に記録・展示する場所とした。また、調査段階から住民らと協働することで、住民自身の地域理解を深めることにもつながった。資料館として活用した古民家は、これまで地域で活動を行う団体や大学の作業場所に活用されていた場所で、展示場所として継続的な運用が可能である。今後は、地域活動の拠点としてのみならず、観光拠点としての役割にもなる場所となる。まちの中で実際に使われてきた建物で展示をすることで、地域の伝統文化を紹介・継承するという教育的な側面だけでなく、地域住民同士や、来街者と地域住民のコミュニケーションを促進することができ、地域振興にも寄与できたと考えている。

研究室名 学会・博物館名	神奈川大学 曽我部・吉岡研究室
テーマ	地域の記憶を記録し共有する場をつくる実践的研究 —徳島県美波町の古民家を活用した暮らしの資料館—

【今後の成果の活用と活動の展開について】

今回は、もともと地域活動の場として活用されている古民家を用いて、古民家の内装や生活用具を民俗資料として展示をした。展示専用の場ではなく、地域活動などの場の設えとしての展示であり、単なる民具のディスプレイにとどまらない、新しい設えのあり方を試行することができた。また、こうした活動には想像以上に多くの関心が向けられることが確認できた。

この地域においても古民家の活用は増えつつあるが、はるかにこえる数の古民家が解体撤去され、多くの民俗資料が無意識のまま廃棄され続けている。今後は、①多様な民族資料を広範かつ継続的に収集する仕組み構築すること、②内装などの設えとして民俗資料を展示・保存しうるこの地域内の空間をリストアップしておくこと、③地域住民と協働する空間づくりのフロー自体を地域活性化に向けたシビックプライドを醸成するためのモデルプランとして手法化することなどをおし、継続的に地域の記憶を収集・記録し共有できる仕組みを構築したい。本活動を含め、古民家の活用による地域活性化は、南海トラフ地震による津波被災が想定される当地域においては事前復興としても位置づけられる。その方向性についても、地域との意見交換などを元に整理したいと考えている。

